

共感

園長 山中 文

先月、「雨の音」というタイトルでお話ししましたが、雨の歌で思い出すことがあります。

子どもの歌に「あめふりくまの子」(鶴見正夫作詞・湯山昭作曲)という歌があります。♪おやまにあ～めがふりました～♪から始まり、雨がちょろちょろ小川になっているところにくまの子がかけてきて、魚がいないかとそっとのぞいて待つけれど、なかなか雨が止まなくて、頭に葉っぱをのせて傘にする、といったお話になっている歌です。

5番まである長い歌詞ですが、ゆったりとお話を感じながら歌える歌になっているのが魅力だったのでしょうか、私の子どもはよく歌っておりました。3歳の頃、よく見ていた月刊絵本に、「あめふりくまの子」の歌がくまの子の挿絵付きで載り、絵本を見るたびに歌うようになりました。

あるとき、自分でめくって頁を見つけ、♪おやまにあ～めがふりました～♪と大きな声で歌っていたのですが、ふと声を止めて、頁の隅のくまの子の挿絵を指差して、「♪おやまにあ～めがふりました～♪は帰っちゃったんだねえ」と言ったのです。ちょうど、その挿絵は、くまの子が、頁の外側の方に行ってしまうように描かれていました。そして、そこからそのくまの子と対話モードになり、ついには「いないいないばあ!」と、絵本の中のくまの子に「いないいないばあ」をしたのです。

私は、ここで二つほど「ふーむ」と思いました。

一つは、「くまの子は帰っちゃったんだねえ」ではなく、「♪おやまにあ～めがふりました～♪は・・・」というように、「くまの子」の部分の歌で表したことです。2～3歳の頃、子どもは歌を一曲として完成しているものにとらえず、言い表したい表現の一つにして、断片的に用います。たとえば、花壇の花を見て、その花がチューリップでなくても「♪チューリップのはなが～♪だあ」と、「チューリップ」(近藤宮子作詞、井上武士作曲)の歌の一部で表現したりします。まだ客観的に説明できる語彙が少ない時に、歌の一部分でちゃんと「あめふりくまの子」に出てきたくまの子を示したり、「いっぱい花が咲いている」という感動を表したりするのですから、すごいなあと思います。

もう一つは、その絵本の中のくまの子に「いないいないばあ」をしたことです。生命のないぬいぐるみやお人形などのものに生命があると思うアニミズム的思考はこの頃の幼児に多く見られますが、まさにその通り、絵本の中のくまの子ちゃんは、この時、この子どもの友達だったようです。もうこういう時期を通り越した私たちにはとても新鮮な出来事です。

こういった表現や思考は、次第になくなり、分化ができてきます。否定したり無理に大人の言葉で説明したりしなくても、「ああ、そうだね」と子どもの表現を認めたり、「本当にたくさん咲いているねえ」と共感しながら別の表現で表したりすることが、表現方法の幅を広げることになるでしょう。

ところで、先の子どもは、「いないいないばあ」をしたのはいいものの、「いないいないばあ!」で目を覆っていた両手を広げた瞬間、その弾みで自分の足に載せていた本が閉じてしまい、あわてて頁を探すも見つからず、涙目で私を見つめてきました。それまでせっかく共感的に見ていたのに、ここで素の親に戻ったことでした!

